

②

『Kにもらった「美しさ』』

私は中学生の頃、いじめに遭っていた。

最初はいじりだった。一緒に下校していた友達に、私が流行りの言葉や曲に疎いことをよくからかわれていたのだ。それがいじめに変わったのは、学校で漢字検定を受けたことがきっかけだった。私と友達の二人で受けたのだが、私は合格でその子は不合格だった。そのことが友達の耳に入ってから明らかに冷たく当たられるようになり、どうせわからないでしょ、と話の輪に入れてもらえなくなった。たちまちそういった空気はクラス中に広がって、掃除を押し付けられたり、傘を折られたり、落としたシャーペンをサッカーボールのように蹴り合われたり、その内容もどんどんエスカレートしていった。クラスに居場所はなく、休み時間が苦痛で仕方なかった。クラスメイトには何を話しかけても無視され、次第に自分の存在意義がわからなくなっていった。

ある日、移動教室の時に別のクラスの K と廊下ですれ違った。K とは小学生の頃に何度か同じクラスになったことがあり、よく一緒に行動していた。彼女は私に気が付くと、ニコッと笑って

「おはよう！久しぶり！」

と言った。

「おはよう。元気？」

平静を装いつつ彼女と話しながら、内心話しかけられたことに驚いていた。その時は、久しぶりに会ったから声をかけたのかと思っていたのだが、それから K は登下校や移動教室で会うたび私にニコニコと手を振り、話しかけてくれた。私は昔と変わらず接してくれる K の態度に安心と温もりを感じたが、きっとこれは以前のクラスメイトである私への社交辞令だと思おうようにして、彼女と深く関わることはしなかった。今思えば卑屈な考えだが、仲良くなれると希望を持って、あとでいじめられたり無視されたりして傷つくのが嫌だったのだ。いつか彼女も、クラスメイトや友達から私の良くないうわさを聞いて、私とは関わらなくなるんだろうと思っていた。

しかし、K の態度はその後も変わらなかった。それどころか、私を見かけると何をしていても近くに来てくれ、休み時間が終わる直前まで二人で話すようになった。彼女と話すことで、私はありのままの自分でいてもいいんだと勇気づけられた。だんだん休み時間が苦痛ではなくなり、いつの間にか彼女のいるクラスに私から足を運ぶようになっていった。

私はある時思い切って、クラスメイトに嫌がらせをされることや、私についてのうわさを流れていそうで不安なことを K に話した。

「そんなことになってたなんて、全然気づかなかった。つらいね。」

私は、もし誰かから何かそういう話を聞いたとしても、その子の話だけ信じてやりちゃんを避けたりするようなことは絶対しないよ。」

## No.A-1

選択テーマ：②「Handsome women」（あなたの身近な人の美しい行いについてのエピソード）

Kはきっぱりとそう言った。私は彼女の言葉に、そばで寄り添ってくれるような温かさを感じた。私にも居場所がある。そのことをそっと気付かせてくれ、私自身をちゃんと見つめようとしてくれるKに心の底から「ありがとう。」と言った。

あれから七年。日常生活で誰かのうわさ話を耳にしたり、憶測や不確かな情報でいっぱい  
のニュースを目にするたび、あの時のことを思い出す。私は自分の経験から、誰かが一方的な思い込みから何かを決めつけ、本当のことを知ろうとしないことで傷つく誰かがいるということを意識するようになった。あの時Kに救われたように、今度は私が目の前の人や物事の真実をしっかり見つめ、寄り添いたいと思っている。

私はKのように、美しい人になりたい。